古代地方官衙政庁域の空間構成

THE SPATIAL STRUCTURE OF LOCAL GOVERNMENT OFFICE DISTRICT IN ANCIENT TIME

海野 聡*

Satoshi UNNO

This study aims at revealing the original form of the government office area in local regions in the 8th century. The research method adopted here is based on intensive examination of both historical documents and archaeological reports.

The results show mainly three conclusions. First, the local government “Kokucho” was planned by the rules according to the provincial class. Second, every “Kokucho” and “Guncho” (a lower government than “Kokucho”) had “Maeniwa”(Front Yard), and it was the very important official place in the district. Third, this “Maeniwa” originated from “Oharidano Miya” in the 7th century.

“Maeniwa is the essential space in the local government office area. The provincial governor (“Kokushi” or “Gunji”) held official ceremonies here to demonstrate the dignity of the ancient state to the local powerful families. Therefore, though the excavation results show various planning types, it was generally accepted as central place of local government office district.

Keywords : Kokucho, Guncho, Kouzukenokuni Koutai Jitsurokucho, Maeniwa(Front Yard),

Kunino Mikotomochi

国庁, 郡庁, 上野国交替実録帳, 前庭空間, クニノミコトモチ

1. はじめに

奈良時代には、律令制度が導入され、国郡による地方支配体制が確立した。そして大宰府、国衙、郡衙、駅家などの律令制度を支える地方官衙が数多く設けられた。

地方官衙については、学術用語が定義されていないため、山中敏史氏が使用する用語に倣う^{注1)}。即ち国衙の政庁域を国庁、郡衙の政庁域を郡庁と呼ぶ。

政庁域の中心建物を正殿、両脇に並ぶ細長い建物を脇殿^{注2)}、正殿および脇殿によって囲まれた空間を前庭空間と称す(図1)。地方官衙の政庁域には、正殿が中心軸に据えられ、両脇殿が中心軸に対称に配置された。

阿部義平氏は、国庁の中にはほぼ方形の南部分の中央に前殿が存在し、脇殿が正殿前面より北にまで延びる点が、平城宮太政官院曹司と類似することから、平城宮太政官院曹司が国庁の祖形であった可能性を指摘している^{注3)}。

山中敏史氏は、国庁の建物配置形式の祖形について、大極殿、朝堂院、内

図1 地方官衙政庁域
(作成海野)

裏内郭といった宮城中枢施設、あるいは大宰府政庁との類似性が認められるので、国庁の構造はそうした施設を祖形として省略、変形、合成して造り出されたものであるとする^{注4)}。

このように既往の研究では地方官衙の建物配置は、中央の権力が地方官衙に強く影響したと考えられていたため、建物配置の祖形を律令制の導入後の中央の宮城や官衙に求めている。

しかし一方で地方官衙の発掘遺構には中央の影響は見出し難い。各地方官衙は、前殿、後殿の有無や脇殿の建物の数も異なる。果たして、地方官衙の建物配置は、律令制度とともに、初めて導入された、新しい建物配置であったのだろうか。本稿では、発掘調査報告書(文末発掘調査報告書一覧参照)と文献史料に記された前庭空間における儀式を通して、国庁、郡庁を対象に地方官衙の建物配置の祖形を明らかにすることを目的とする。

2. 国の等級による国庁の比較

まず各国の国庁を比較することで、国庁の建物配置の特徴をみる。

国庁の建物配置は、山中敏史氏によって3つに類型化されている。長舎型、大宰府政庁型、城柵政庁型の3つである。長舎型はもっとも一般的な形で近江(図2-①)、伊勢(図2-②)、伯耆(図2-⑥)、下

* 奈良文化財研究所 研究員・修士(工学)

Nara National Research Institute for Cultural Properties Researcher, M. Eng.

図2 国庁の建物配置（山中敏史氏作成^{注5)}を一部改変）

野(図2-⑦)、美濃(図2-⑧)、三河(図2-⑨)の国庁のように脇殿が長大な建物でコの字型配置をとる。大宰府政庁型は肥前(図2-④)、筑後朝妻(図2-⑤)、伊賀(図2-⑪)の国庁のように脇殿を左右に2棟ずつ配置したコの字型配置である。城柵政庁型は陸奥(図2-③)、出羽国庁（城輪柵遺跡）のように正殿と桁行の短い両脇殿を品字に配置する。

このように山中敏史氏は国庁建設後の検出遺構を分類するが、計画段階における考察を欠く。そのため計画段階における、国の等級と建物配置の関係について検討する。

国の等級は時代によって変化しており、さらに国庁の建設された時期も不明であり、国ごとに異なる。よって本稿では、『延喜式』の民部式によって記された国々の等級区分をもとに分類する^{注6)}。なお現在までに国庁や正殿の明らかとなっている国庁のうち、出羽国は対蝦夷政策の進行状況に合わせて、城輪柵、秋田城の2ヶ所に国庁が移転しており、多賀城以上に城柵としての性格が強いため除外して考察する。それ以外の国庁配置図を国の等級によって分類したものが図2である。

まずは大國の特徴を検討する。大國の国庁の判明する遺跡は近江、伊勢、陸奥（多賀城）の3国である(図2)。

伊勢は伊勢神宮を擁した神郡があり、神祇政策上、重要な地である。また近江は大津京が置かれた特別な地である。そのため大國の中でも特別な扱いであった可能性がある。よってこの2国をもって大國の国庁を一般化することははばかれるが、2国の国庁は規模もほぼ等しく、基壇・軒廊を用いて、正殿の背部に後殿を配置しており、類似している。

この2国の大國の国庁を上国（下野、三河、筑後朝妻、伯耆、美濃、肥前）の国庁と比較すると、国庁の広さはほぼ同じであるが、上国の国庁には大國に見られる脇殿と正殿をつなぐ軒廊が存在しない。この正殿から両脇殿や後殿へとつながる軒廊を備える点は、大國のみに見られる特徴である。この軒廊に注目すると、軒廊は正殿から他の建物に連結している。このことから業務の中心は正殿で行われ、さらに後殿や脇殿といったほかの建物に軒廊を通して移動する必要があったと推定できる。

ではこの軒廊は何のために造られたのであろうか。

まず考えられるのは、機能的要求によるものである。確かに大國

表1 国庁の政庁域と前庭空間

等級	国名	政庁域			前庭			脇殿 (棟)	備考
		東西 (m)	南北 (m)	面積 (㎡)	東西 (m)	南北 (m)	面積 (㎡)		
大國	大宰府	114	200	22800	57	97	5529	4	政庁域が回廊によって分かれる。
	陸奥(多賀城)	103	117	12051	66	57	3762	2	
	近江	74	86	6364	37	37	1369	2	政庁域南北確定せず。
	伊勢	83	100	8300	43	34	1462	2	
上國	美濃	71	71	5041	43	49	2107	2	政庁域は確定せず。
	三河	64			46			2	政庁域が回廊によって分かれる。
	下野	94	94	8836	60	40	2400	2	後殿がある可能性あり。
	出羽(秋田城)	89	74	6586		40		2	
	出羽(城輪柵)	126	126	15876	67	66	4422	2	政庁域南北は不明
	伯耆	83	97	8051	51	49	2499	2	
	筑後朝妻	126	131	16506	71	74	5254	4	政庁域南北確定せず。
	肥前	83	103	8549	40	31	1240	4	政庁域が回廊によって分かれる。
	中国	63	63	3969	40	46	1840	4?	政庁域は確定せず。
	下國	40	43	1720	20	20	400	2	

報告書（文末一覧表）より作成

では業務を行ううえで、脇殿と正殿の往来を頻繁に行う必要があったために、正殿と脇殿を軒廊でつないだ可能性も考えられる。しかし大國と上國で人員の差が少ないことから業務量に大きな差があったとは考えにくく、この可能性は低い^{注7)}。この業務量の差が少ない点は、業務を行う国庁の広さが大國と上國ではほぼ等しいことにも表れている。

寧ろ、機能面以外の要求によって造られたのではないであろうか。つまり軒廊は大國と上國の実用面での差によって造られたのではなく、大國のみに許された形式であったと考えられる。この点は、大國以外の上國、中国、下國には軒廊が見られず、大國のみに見られることから確認できる。このように大國と上國の差は国庁の広さによって示したのではなく、軒廊で建物をつなぐ形式によって示したといえる。

同じく大國である陸奥には伊勢や近江に見られる軒廊が存在しない。そして他の国庁を比べても、前庭空間が非常に大きい(表1)。これには多賀城の性格と関係している。多賀城は鎮守府も兼ねており、軍事拠点としての性格が強く、兵士の集結という城柵としての機能を求められたため、前庭空間を広くしたと推定できる。この点は、表1のように出羽や筑後の国庁も、多賀城と同様に前庭空間が大きいことから確認できる。出羽は軍事的な機能を有し、蝦夷との抗争の激しかった東北の城柵であり、筑後は防人が置かれた地であり、両国ともに、軍事的に重要な拠点であった。このように陸奥・出羽・筑後といった軍事的に重要な国には、広い前庭空間が設けられたのである。

これまで述べてきたように大國においては、正殿から後殿や脇殿へつながる軒廊を用いる形式が成立していた。そして軍事的に重要な国の国庁の前庭空間は例外的に広く、兵士の集結場所として利用されていたと考えられる。

次に上國、中国、下國における国の等級と国庁の関係について検討する。図2に示したように、上國、中国、下國を見ると、大國と同じく正殿と両脇殿を備え、国庁の建物配置は類似している^{注8)}、最も注目に値するのが国庁の広さである(表1)。大國と上國の国庁の広さには明確な違いが見られないが、これは前述のように軒廊を用いる特別な形式で上國との差を示し、国庁の広さで差をつける必要が無かったためである。これに対し、大國以外の国では上國、中国、下國と移っていくにつれて、国庁は狭くなっている。言い換えると、大國以外の等級の国では、上國、中国、下國と等級が下がるにつれて、国庁の広さは狭くなっていくのである。このことから、大國を除いた国では国庁の広さが等級に準じて決められていたと推

定される。

国の等級と国庁の広さには関係が見られるが、例外的に国の等級とは関係なく、独自の特殊な形式の建物を採用する例も見られる。伯耆国には、楼とみられる^{注9)} 両脇殿と並んで存在する4棟の総柱建物が存在する。楼は駅家と同様に、官衙を象徴する存在として用いられていた^{注10)}。より等級の高い大国は、軒廊を用いる形式を採用したが、上国である伯耆国庁は軒廊を用いることができなかった。そのため、地方支配のために中央権力を誇示する装置として、楼を用いたのであろう。

この楼とみられる総柱建物は他の国庁には見ることができないことから、形式化された大国の正殿と脇殿をつなぐ軒廊とは異なり、伯耆国が独自に採用した形式であると考えられる。

このように各国庁を等級ごとに比較することで、国庁の計画時のルールについて、以下の3点が推定された。

- (1) 大国のみに正殿と脇殿をつなぐ軒廊が存在する点から、この軒廊は大国のみに用いられた形式であった。
- (2) 国庁には建物で囲まれた前庭空間が存在し、特別な形式を用いた大国以外の国は、等級の高い国から低い国に移るにつれて、国庁の規模と前庭空間は狭くなる。このことから上国、中国、下国では国の等級に準じて、国庁の広さが定まっていた。
- (3) 陸奥、出羽、筑後のように軍事的な要素の強い国庁の前庭空間は、国の等級に関わらず例外的に広がる。これには兵士の集結という機能的な要求が影響しており、建物で囲まれた前庭空間が重要な役割を担っていた。

3. 郡庁の前庭空間

これまで述べてきたように、国庁には中心軸上に複数の建物が存在する例や脇殿が複数存在する例が存在し、建物配置に明確な共通点があるとは言えない。

郡庁では正殿が存在しない例や長舎によって政庁域を圍繞することも多く、国庁以上に共通点を見出すことは難しい。

しかし郡庁において、正殿と脇殿といった建物の規模や数は異なるものの、現在までに発掘されている郡衙遺跡（文末発掘調査報告書一覧参照）の政庁域には、国庁と同様に、前庭空間が必ず存在する^{注11)}。図3はその4例である。

郡庁に前庭空間が存在することは、『上野国交替実録帳^{注12)}』の次の記述からも知ることができる。

那波郡（中略）

郡廳壹宇

向屋壹宇 公文屋壹宇 副屋壹宇

（中略）

新田郡（中略）

郡廳

東□屋壹宇 西長屋壹宇 南長屋壹宇

□□屋壹宇 公文屋壹宇 厨壹宇

（後略）

那波郡には向屋という建物が記述される。この向屋は、2棟の建物が互に向かい合って対をなす建物を指すとみられ、脇殿の一方であると考えられる。そこから正殿と両脇殿によって囲まれた前庭

図3 郡庁の建物配置（山中敏史氏作成^{注13)}を一部改変）

図4 天良七堂遺跡遺構配置図（シンポジウム^{注14)}配付資料）

の存在が読み取れる。

新田郡の記述は郡庁の様子をもっとも良く示しており、東西南北の四方を長屋によって囲み、前庭空間を構成するという形式をとっている。

この新田郡衙と比定される発掘遺構として、2007年に群馬県太田市天良町7番地内の天良七堂遺跡が発見された。この遺跡では、図4のように郡庁域の東西南北の四方に細長い建物が位置し、これらの建物が『上野国交替実録帳』の記述にある長屋と見られている。この遺跡が発見されたことによって、文献史料と発掘史料の両面から、郡庁に前庭空間が確かに存在していたことが明らかになった。

4. 前庭空間における儀式

現在までに発掘されている地方官衙の発掘史料を検討すると、国庁、郡庁のすべてに前庭空間は存在する。この前庭空間は地方官衙に必須の空間であったのではないだろうか。国庁や郡庁の前庭空間で行われていた儀式について検討する。

まず国庁において国司や郡司が執り行う儀式について検討する。これには元日拝賀、饗宴、告朔の3つが挙げられる。

元日拝賀は『儀制令 18^{注15)}』に記される。

凡元日。国司皆率僚属郡司等。向廳朝拜。訖長官受賀。設宴者聽。其食以当処官物及正倉死。所須多少従別式。

元日拝賀とは、元日に国庁において執り行う拝賀の儀式である。これは中央で天皇を「庁」つまり大極殿に据えて、官人が拝賀することに対応している。国庁では国司が郡司を率いて、「庁」すなわち正殿に向かって拝賀し、その後、饗宴を執り行う。元日拝賀が国庁において実際に執り行われていたことは、現在までに発掘されているすべての国庁に前庭空間が存在するという事実が裏付けている。

饗宴については、『万葉集 4136^{注16)}』の伴家持の歌に、郡司とともに国庁で行ったことが記されている。

天平勝寶二年正月二日、於國廳給饗諸郡司等宴歌一首。

に参加していた。つまり律令制度導入以前の「一体型」の宮に、すでに前庭空間が存在したのである。

では果たして、朝庭空間が律令制にともなった「分離型」の宮城ではなく、「一体型」の宮と同形式の空間を有することは、国庁に前庭空間が存在することとどのような関係があるのだろうか。これは7世紀の天皇ないし朝廷の命を奉じて地方に赴任する官人である「クニノミコトモチ」が、律令制のもとで国司へと変化したことと関係がある。

もともと国司は、「天皇の代理」として、天皇の「ミコト」、すなわち天皇の言葉を持って一時的に地方へ赴任した「クニノミコトモチ」であった。それが8世紀になって地方に常駐する国司へと変化した^{注26)}。そのため天皇が大殿に出御し、臣下が朝庭に参列すると同様に、「クニノミコトモチ」である国司が天皇の代理として正殿、在地の隷属集団である郡司が前庭空間という形式が重視されたと考えられる。

その結果、国庁において前庭空間で儀式を行う必要から、前庭空間を必須のものとして計画したのである。この前庭空間が必要な空間であったことは、現在までに発掘されている国庁・郡庁の全てに前庭空間が存在するという事実が示している。

そして宮において天皇と臣下の関係を朝庭空間で表したように、地方において、天皇の代理である「クニノミコトモチ」と郡司という関係を、国庁の前庭空間で実現したと考えられる。

このように前庭空間は、天皇の私的空間から政務空間が分離した朝堂院や太政官院といった、律令制度とともに導入された新しい空間ではなく、それ以前の天皇の私的空間と政務空間が一体化した宮にその祖形は存在した。

つまり前庭空間は、律令の儀式を行うために新たに成立したのではなく、律令制度導入以前から存在し、地方官衙の政庁域は、この前庭空間を中心に構成されたのである。

6. まとめ

以上、発掘史料と『上野国交替実録帳』や『律令』を中心に、地方官衙の政庁域の構成について考察した。そして以下の6点が推定された。

- (1) 地方官衙において、前庭空間は儀式空間として重要な役割を果たした。そして筑後、多賀城、出羽などの対外的緊張感の高い辺境の国では、軍団兵士の集結のために広い前庭空間が必要であった。
- (2) 国の等級ごとに国庁を比較すると、大国には上国、中国、下国には見られない軒廊という形式が存在した。
- (3) 上国、中国、下国は国の等級が下がるにつれて、国庁や前庭空間が狭くなることから、国の等級に準じて、国庁の広さが定められていたと推定された。ただし、軍事的に重要な国の国庁は、前述のように例外的に広い前庭空間が設けられた。
- (4) 国庁や郡庁の建物自体の数や規模には共通点は見出しがたいが、これまでに発掘された国庁、郡庁のすべてにおいて前庭空間が存在した。
- (5) この前庭空間が重要な役割を果たしており、そこでは地方官人が参加する儀式が行われていた。国では、元日拝賀、饗宴、告朔などの儀式が国庁において執り行われていた。郡では、国司

が部内を巡行する際の接待として饗宴が行われ、その饗宴は郡庁で執り行われたと推定された。

- (6) これまで、地方官衙は律令制度によって作られた新しい施設であると指摘されていたが、前庭空間に着目することで、それが律令制度以前から存在する宮の形式を受け継いでいたと判明した。そして天皇と臣下という空間構成を宮の朝廷空間で表現したように、地方官衙においても、天皇の代理である「クニノミコトモチ」と地方豪族である郡司という関係を国庁の前庭空間において再現し、律令制支配を強めようとする意図が見られた。

注

注1) 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房 1994年

なお、史料上の用語としては『上野国交替実録帳』に記載される。『上野国交替実録帳』は長元3年(1030)に上野国司の交替に際して作成された文書の草案で、九条家本延喜式の巻第16、20、32、38の紙背文書である。『平安遺文』第9巻(4609号)及びそれを元に再校訂した『群馬県史』資料編4(群馬県史編さん委員会編1985年)に収録されているものを用いる。「佐位郡八面甲倉」と比定される建物として、三軒屋遺跡から八角形の総柱建物が発掘されたことから、上野国交替実録帳の史料としての信頼度は高く評価されている。

本文書には庁屋・向屋・副屋・長屋・公文屋・宿屋・厨家・納屋・厩・館屋の建物名が用いられる。郡庁においては建物ごとの機能が明らかとなっていないことから、史料上の用語ではなく、正殿・前殿・後殿・脇殿のように配置が明確となる山中敏史氏の用語に倣う。

注2) 郡庁に多くみられるように、築地塀や柵などによる建物から独立した圍繞施設が存在せず、建物によって政庁域を囲む場合は、脇殿ではなく長屋という語を用いる。

注3) 阿部義平「国庁の類型について」『国立歴史民俗博物館研究報告』10 1986年

注4) 山中敏史『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2003年 p.134

なお、この文献は地方官衙研究の基礎資料集である。

注5) 同上 p.133 を一部改変

注6) 『民部式』によると、大国は、大和、河内、伊勢、武蔵、上総、下総、常陸、近江、上野、陸奥、越前、播磨、肥後の13国である。上国は、山城、摂津、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、相模、美濃、信濃、下野、出羽、加賀、越中、越後、丹波、但馬、因幡、伯耆、出雲、美作、備前、備中、備後、安芸、周防、紀伊、阿波、讃岐、伊予、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前の35国である。中国は、安房、若狹、能登、佐渡、丹後、石見、長門、土佐、日向、大隅、薩摩の11国である。下国は和泉、伊賀、志摩、伊豆、飛騨、隠岐、淡路、壹岐、対馬の9国である。

注7) 『職員令』によると、大国は守1人、介1人、大掾1人、少掾1人、大目1人、少目1人、史生3人の計9人に対し、上国は守1人、介1人、掾1人、目1人、史生3人の計7人が任じられている。

史生は公文書を繕い写し、文案を整理・作成し、四等官の署名を得ることを担当している下級書記官である。この下級書記官である史生の人数が同じであることから、業務量もほぼ同じであると推定できる。

注8) 日向国庁や伊賀国庁の脇殿の北側に、正方形プランの建物が存在するが、これがどのような機能を持つ建物であるかは不明である。しかし、桁行の長い脇殿とは平面が異なる。

注9) 伯耆国には4棟の総柱の建物が見られる。総柱建物は構造耐力が大きく、この点から考えるとこの総柱建物は正倉、公文屋、樓の3つの可能性が考えられる。正倉や公文屋は、収容される内容物の重量、樓は二層以上であるため、建築物自体が重いと考えられるためである。

正倉は『倉庫令1』に倉は官倉から50丈離すことを定められており、政庁域に正倉が存在したとは考えにくい。さらに正倉は建築群を形成し、正倉院の形をとることが多く、正倉ではないと考えられる。

公文屋は国庁の機能上、どの国においても必要であったにもかかわらず、大国の政庁域に同様の総柱建物は存在しない。国庁域に公文屋をおく必要があるのであれば、他の国庁にも伯耆国と同様に総柱建物が存在するはずである。このことから伯耆国のみに存在する総柱建物が公文屋である可能性は低い。

注10) 『扶桑集』巻7菅丞相の詩に「駅楼執手泣相分」と記され、『菅家文草』巻4に「題駅楼壁」という詩があり、駅楼の存在が窺える。駅家は『日本後紀』大同元年5月14日条に「本備蕃客、瓦葺粉壁」とある。蕃客に備えるために瓦葺、白壁とすることを求めており、官衛の威厳を示す施設であった。

注11) 現在までに政庁域が判明した郡衛と比定される遺跡は、文末の発掘調査報告書一覧及び天良七堂遺跡である。

注12) 注1)参照。

文書の内容は、国司の交替の引継ぎのために建物を含めた品目ごとに名称・員数・法量を掲げて前回の交替時の検査と現況の比較するものである。項目ごとに、まず破損の状況およびその理由を掲げ、既に無くなってしままい無実となっていたものについては「前日記」（前回に作成された記録）を引用することによって示し、それを現状と比較する形式をとる。前回と異同がない場合には「今検同前」と記されている（前田和之『群馬県史4』資料編4 p.1259）。そのためすべての建物の名前が記されているわけではない。

注13) 注4) 前掲書 p.161

注14) 2008 年度国史学会大会古代史シンポジウム「北関東の郡家と地域社会」（國學院大学 2008 年 5 月 25 日）

注15) 『律令』日本思想大系新装版 岩波書店 1994 年

注16) 『万葉集4』日本古典文学大系 岩波書店 1962 年

注17) 『儀制令5』注15) 前掲書

『国史大辞典』告朔（こうさく）の項によると、中央においては、毎月一日、朝堂院において、各官司の前月の公文を天皇に奏上する行政豊国の儀式。地方において、毎月郡司から国司へ告朔帳が提出されており、毎月の行政報告も告朔と呼ばれていた。

注18) 『戸令 33』注15) 前掲書。国守が年に1度、属郡を巡行し、風俗を観て、古老に古事等を問い聞き、囚徒について記録し、裁判の不正を正し、政ごとや刑罰の得失を詳しく視察し、百姓の憂い苦しむところを知り、五教を論し、農の功を勸め務めさせること。

注19) 注15) 前掲書

注20) 岸俊男『日本の古代宮都』岩波書店 1993 年 p.19

注21) 中尾芳治『難波宮の研究』吉川弘文館 1995 年 p.108

孝徳朝説は、難波宮跡の発掘担当者を中心として出された考えである。朱鳥元年に消失した遺構をそのままのかたちで孝徳朝まで遡らせ、前期難波宮跡を難波長柄豊碕宮とする。

これに対し天武朝説は、長柄豊碕宮の完成した白雉3年（652）12月から消失した朱鳥元年（686）正月まで33年を経過していることを指摘する。少なくとも一度の造替痕跡があつてしかるべきであるにもかかわらず、一部をのぞいて前面に造替痕跡がないことと、前期の遺構に示される大規模かつ朝堂院を伴う整然とした殿舎配置が孝徳朝よりは天武朝の国制によりふさわしい点の2点から、前期難波宮は天武朝の造営と考える説である。

注22) 中尾芳治氏も同様の見解を示している（同上 p.106）。

注23) 注20) 前掲書 p.22

注24) 岸俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店 1988 年 p.256

なお小澤毅氏は小墾田宮と嶋宮で機能を分享し、両宮が有機的に結合し単体の宮ではなく、総体として宮都空間が成立し当初より一定の計画のもとに配置されたものではなく、本格的な都城の成立に向けての過渡的状況であるとしている（小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店 2003 年 pp.102-103）。

注25) 林部均「飛鳥浄御原宮の庭と朝廷・朝堂」『古代宮都形成過程の研究』青木書店 2001 年

林部均氏は、伝承板蓋宮跡と飛鳥浄御原宮には、「庭」「朝庭」「朝堂」の三つが存在したことを指摘している。そして庭空間は、小墾田宮においても見られ、首長居館以来の飛鳥の宮がもつ伝統的な要素であったとする。

注26) 『国史大辞典』国宰（くにのみこともち）の項によると、天皇ないし朝廷の命を奉じて地方に赴任する官人の総称で、臨時に地方に赴く官人のこと。

また『国史大辞典』国司（こくし）の項によると大化前代の地方官というべきは国造・県主であり、また時に天皇あるいは朝廷の命を奉じて地方に赴く臨時の官としての「みこともち」（国宰）があつたが、後の国司のように一定期間、現地に常駐して任務を遂行する地方官は存在しなかった。

発掘調査報告書一覧

国庁

陸奥(多賀城)：宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡政庁跡本文編』1982

年 近江：滋賀県教育委員会『滋賀県文化財調査報告書 第6冊』1977 年 伊勢：鈴鹿市教育委員会『伊勢国分寺・国府跡—長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業概要報告—』1994 年、鈴鹿市教育委員会『伊勢国分寺・国府跡2』1995 年 美濃：垂井町教育委員会『美濃国府跡発掘調査報告Ⅱ』1999 年 三河：豊川市教育委員会『三河国府跡確認調査報告書』2003 年 下野：栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財調査報告集第35集 下野国府跡Ⅱ—昭和54年発掘調査概報—』1980 年 出羽（秋田城）：秋田市教育委員会『秋田城柵—政庁跡—』2002 年 出羽（城輪柵）：酒田市教育委員会『史跡城輪柵昭和59年度遺構調査概報』1985 年 伯耆：倉吉市教育委員会『伯耆国府跡発掘調査概報（第5・6次）』1979 年 筑後朝妻：久留米市教育委員会『筑後国府—平成12・13年度発掘調査概要報告— 久留米市文化財調査報告書第182集』2002 年、久留米市教育委員会『筑後国府—平成15年度発掘調査報告・概要報告— 久留米市文化財調査報告書第200集』2004 年 肥前：佐賀県教育委員会『佐賀県文化財調査報告集第78集 肥前国府跡Ⅲ』1985 年 日向：宮崎県教育委員会『国衙跡保存整備基礎調査報告書』2001 年 伊賀：三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財調査報告99—4伊賀国府跡（第4次）発掘調査報告』1992 年

郡庁

名生館官衙遺跡：宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城関連遺跡発掘調査報告書第6冊 名生館遺跡Ⅰ』1981 年、古川市教育委員会『宮城県古川市文化財調査報告書第8集 名生館官衙遺跡Ⅸ』1989 年、古川市教育委員会『宮城県古川市文化財調査報告書第9集 名生館官衙遺跡Ⅹ』1990 年 東山官衙遺跡：宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城関連遺跡発掘調査報告書第18冊 東山遺跡Ⅶ』1993 年 三十三間堂遺跡：宮城県教育委員会『宮城県文化財報告書第131集 亘理町三十三間堂遺跡ほか』1989 年 神野向遺跡：茨城県鹿島町教育委員会『鹿島町の文化財第46集 神野向遺跡Ⅴ—昭和59年度発掘調査概報—』1985 年 上神主・茂原遺跡：上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会『上神主・茂原官衙遺跡』2003 年 嶋戸東遺跡：千葉県教育委員会『成東町嶋戸東遺跡発掘調査報告書』1998 年、千葉県教育委員会『成東町嶋戸東遺跡第3次発掘調査報告書』2000 年、千葉県教育委員会『成東町・山武町嶋戸東遺跡第4次発掘調査報告書』2001 年、千葉県教育委員会『千葉県山武郡成東町・山武町嶋戸東遺跡第6・7・8次発掘調査報告書』2006 年 御殿前遺跡：東京都北区教育委員会社会教育課『北区埋蔵文化財調査報告第4集 御殿前遺跡』1988 年 今小路西遺跡：今小路西遺跡発掘調査団『神奈川県鎌倉市 今小路遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書第1分冊本文篇』1990 年、今小路西遺跡発掘調査団『神奈川県鎌倉市 今小路遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書第2分冊図版篇』1990 年 下寺尾西方A遺跡：財団法人かながわ考古学財団『かながわ考古学財団調査報告157 下寺尾西方A遺跡』2003 年 弥勒寺東遺跡：関市教育委員会『美濃国武義郡衛 弥勒寺東遺跡—第1～5次発掘調査概要—』1999 年 岡遺跡：栗東町教育委員会『岡遺跡発掘調査報告書1次・2次・3次調査』1990 年 正道官衙遺跡：城陽市教育委員会『正道官衙遺跡（城陽市埋蔵文化財調査報告書第24集）』1993 年 万代寺遺跡：郡家町教育委員会『万代寺遺跡発掘調査報告書』1983 年 古志本郷遺跡：島根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅴ 出雲国神門郡家関連遺跡の調査 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ』2003 年 下本谷遺跡：下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡—推定備後国三次郡衛跡の発掘調査報告—』1975 年、広島県埋蔵文化財センター『下本谷遺跡第6次発掘調査概報』1985 年 小郡官衙遺跡：小郡市教育委員会『小郡遺跡 小郡市文化財調査報告書第6集』1980 年 有田遺跡：福岡市教育委員会『有田・小田部33 福岡市埋蔵文化財調査報告書第649集』2000 年 大ノ瀬官衙遺跡：新吉富村教育委員会『大ノ瀬下大坪遺跡 新吉富村文化財調査報告書第10集』1997 年

（2009年5月7日原稿受理，2009年8月10日採用決定）